

## 生き物に触れる①

2歳児クラス 15名 各60分程

### ○活動

- ・生き物に触れ、そこから様々な表現活動につなげる

### 準備したもの

虫かご、ぬりえ、お絵描きセット  
図鑑、絵本、紙芝居、写真

### ○活動内容

- ・戸外で虫探しを行い、様々な春の虫を捕まえたり観察したりする。
- ・戸外で見つけた虫を図鑑で調べる。
- ・虫に関連する活動（宝探し、ぬりえ、おえかき、デカルコマニー等）を行う。

### ○保育者の問いかけやアプローチ

- ・生き物に興味のある子どもが多かったため、春の虫の写真や絵本を部屋の中に提示していく。
- ・戸外へ行く前に、グループタイムで「今日はどんな虫がいるかな?」「どこにいると思う?」など、子どもの期待が膨らむような声掛けを行ない、だんごむしやアリなど、身近な生き物から自分たちで探し出すことができるように、生息場所がのっている絵本や図鑑を常に環境の中に置いておく。
- ・戸外へ出られない時でも、室内の活動で、蝶々、ダンゴ虫、アリ、テントウムシのイラストをラミネートしたものを探す、宝探し（虫探し）を行い、興味が継続できるようにした。
- ・粘土や絵画で虫を作ったり描いたりする姿が見られた為、製作へと繋げ、シール貼り（テントウムシ）、デカルコマニー（蝶々）などで、それぞれが自由に表現できるような活動を取り入れていった。また、それらを室内に飾り、そこから生き物の話が膨らむことができるような環境を作った。
- ・虫を見つけたその日の夕方にグループタイムを行い、どこで何を見つけたのかをみんなで共有する時間を設けた。

### ○子どもの様子

戸外で虫を見つけた時には自分たちで調べて、そこから会話が広がっていく姿が見られた。中には、図鑑を見るのが難しい子もいたが、興味のある子は、集中して図鑑の中から見つけた虫を探し出していた。製作や集団遊びでは、興味のある虫を用いたことで、その活動自体（製作や集団遊び）があまり好みでない子でも、参加するといった姿が多くあった。「テントウムシには、丸い点々があるんだよ!」「目も付けないと!」「こういう模様の蝶々はいるのかな?」と細部まで表現している姿が見られた。

また、テントウムシの触覚を「耳」といっている子がいたことで、他児が「テントウムシの耳はどこだ?」と疑問を抱いた。保育者も知らないことだった為一緒に調べてみたが、はっきりとした答えは見つけれなかった。そこで、「どこで聞いているのかな?」子どもたちと色々予想してみたが、やはり「触覚が耳ではないか?」というのが子どもたちの現段階での結論となった。

集団遊びの宝探しは、戸外で虫を探するときと重なったようで、「もしかしたら、虫さんたちはこうやって隠れてるかもしれない!」と探す意欲が増していた。実際に戸外へ出た際になかなか見つからずにいると「きっとかくれんぼをしてるんだよ!」「隠れるのがうまいのかな?」と、宝探しの活動と繋がっているようだった。

また、絵本や図鑑に書いてあったことを思い出した子は、「もしかしたらここにいるかもしれない!」と

推測し、「絵本には、ここにいるってかいてあったのにな」と、言い、その場所に居なくても、推測を続けながら、違う場所を探す姿も見られた。



本物の蝶々さんみたいに  
綺麗になった！



テントウムシのてんてん、  
いっぱい付けちゃおう～！



ダンゴムシは石の所にいるって  
書いてあったんだけどな・・・



葉っぱは食べるかな？  
お砂も少し入れてあげよう！

### ○振り返り

常に環境の中に虫に関することを入れ込んでいたことで視覚的に触れ、関心が広がるようだった。

図鑑は年齢的には難しいが、関心のある子は夢中で見ていて、保育者に読んでもらいながら、この年齢なりに知識を得ている姿が印象的だった。

宝探し（虫探し）はゲームとしても楽しみ、実際の虫探しとしても得た知識を確認するような姿も見られ、子どもたちの探求する様子が見られた。

中でも、保育者が知らなかったことに疑問を持つ姿もあり、一緒に調べ、答えがわからなくても推測しながら、様々な想像を膨らませていくことができ、子どもなりの考えに触れることができ、楽しい活動になった。

また、興味のある虫から製作や集団遊びなどの表現活動に繋げたことで、その活動自体に参加しにくい子ども、興味をもって参加し、より一層イメージをもって楽しむ姿が見られたのもよかった。

## 生き物に触れる②

2歳児クラス 15名 60分

### ○活動

- ・飼育をする

### 準備したもの

虫かご、ぬりえ、お絵描きセット  
図鑑、絵本、紙芝居、写真

### ○活動内容

- ・プランターで見つけたあおむしを飼育して、自分たちで世話をしていく。
- ・あおむしの種類やどんな蝶になるのかを、図鑑で調べる。
- ・青虫が何色の蝶になるか、(なって欲しいか)表現活動につなげる。

### ○保育者の問いかけやアプローチ

- ・プランターの中で見つけたあおむし(7匹)は何をたべるのか?どうやって飼育をすれば良いのかを子どもたちに投げかける。
- ・緑のあおむしは何色の蝶になるのか?何色になってほしい?と、子どもたちのイメージが広がるように、絵でイメージを表現できるようにした。
- ・飼育途中、あおむしが死に初め、残り1匹となってしまったことに対して、保育者もなぜ死んでしまったのかが分からなかった為、子どもたちと一緒に考える時間を設けた。
- ・残った1匹が緑から黒色の幼虫に変化したことに気が付いた子がいた為、それをグループタイムで他児に共有し、どうしてそうなったのかを問いかけるとともに、新たな図鑑を絵本棚に用意しておく。
- ・最後には死んでしまった。そのことをグループタイムで共有し、どうして死んでしまったのかを考える時間を設けた。

### ○子どもの様子

見つけた青虫の飼育をし、初めは、「葉っぱ、石、ミカン、砂など」、自分たちの想像で何を食べるのかを考えていた。葉っぱやミカンは食べるが、砂や石は食べないということに気が付いた子がいた。図鑑を見ていくうちに、「ハートの葉っぱ(カタバミ)が好きなんだ!」と図鑑に載っているのを見つけ、カタバミ収穫に没頭。実際にすごい速さで食べている様子を見て、「あおむしさん食べてくれた!」「本当にハートの葉っぱが好きなんだ!」と、図鑑に載っていることと繋がったことにも喜んでいた。

主に男の子は図鑑を使って、「きっとこの蝶々になるんだよ!だって幼虫がこれと同じだよ!」と実際のものを見比べている子がいた。女の子はこんな蝶々になってほしい!と、自分のイメージを絵画で表現している子もいた。

死んでしまった青虫のことを、子どもたちからは、「ご飯をいっぱい食べなかったからかな?」「病気になっちゃったのかな?」「この子(残った1匹)にやられちゃったんだよ!」と、話していた。

黒くなったことに対する衝撃が大きかったようで、食いつくように長い間見ていた。動きが今までなあおむしと違うことにも気が付き、その様子を観察することや、あおむしと同じ動きをして自分たちの身体を動かすことを楽しんでいる姿も見られた。

この現象に「変身したんだ!」という子もいれば、「これは蝶々じゃないのかもしれないね」と感じ

る子もいた。

毎日よく観察していた子は、「ご飯をたくさん食べていたのに、どうして死んでしまったの？」と現実的な疑問をもっていた。他にも、「他のあおむしがいなくなって（死んでしまって）寂しくなったから死んじゃったんじゃない？」と、あおむしを擬人化してとらえている子もいた。あおむしの死後も、カタバミや他のイモムシを見つけると、あおむしのことを思い出して話す子が多かった。



### ○振り返り

子どもたちが思い描いていたり、推測したりする時間を設けながら、様々な想像を膨らませていくことができた。実際にあおむしを飼育していく過程で、疑問や発見が出てきて、それを拾いながら環境設定をしたり、声を掛けたりしたことで、興味の継続、広がりにつながっていったように思う。

想像と違ったこともあったが、目の前の変化など視覚的にみることができたことで、子どもたちの更なる好奇心へと繋がっていったのではないかと考える。保育者もどんな成虫になるのかが分からなかったこともあり、子どもたちの考えを聞きながら、一緒に飼育を楽しむことができた。その中で、保育者も分からないということを子どもが感じると、より一層答えを見つけ出そうという姿にも繋がったことが良かった。この活動を通して、子どもたちは、生き物へ対して優しい気持ちで接し、命の大切さを感じている子もいた。

また、あおむしの死後も、様々なことをあおむしに結び付けていて、子どもたちの中でまだ興味が続いているようだった。来年度も、この活動が繋がっていけるように引き継げると良い。